



Title	明治期における榎本武揚の権力構造〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	武藤, 三代平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12509号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65743
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Miyohei_Muto_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 武藤三代平

主査 教授 白木沢旭児
審査委員 副査 准教授 川口暁弘
副査 教授 権錫永

学位論文題名 明治期における榎本武揚の権力構造

本論文の研究成果は、以下の四点にまとめることができる。第一に、明治政治史における榎本武揚の評価を新たに提示したことである。通説では、榎本は薩派（薩摩派）として位置づけられていた。武藤氏は、一次史料を用いて再検討し、明治中期に榎本は黒田と距離を置いており、第一次伊藤内閣に通相として入閣したのは、井上馨（長州）の推挙があったこと、他のケースにおいても内閣交代ごとに相応な政治的理由があったこと、伊藤博文らは榎本について勉強量は他を圧倒しているとしてその学知を高く評価していたことを明らかにした。

第二に、日本の近代外交黎明期におけるインテリジェンス活動の存在を明らかにしたことである。近年、日本外交史分野においてインテリジェンスの用語が用いられるようになったが、武藤氏はこれを「政策決定者が政策を決定するうえで、国益を実現していくための政策案件、または戦略案・提言」と定義し、榎本が駐露公使時代にロシア地理学協会から学び、日本に導入したものであること、榎本が中心となって『千島誌』、『朝鮮事情』を刊行したことを明らかにした。

第三に、榎本の経済的基盤としての北海道における土地所有、都市開発を明らかにしたことである。榎本は、政治家・外交官としての公務に加えて、当初から事業家・資本家を志しており、北辰社がその活動の場であった。榎本は、高島郡に広大な土地を所有していた。小樽の港湾開発、都市開発は、小樽郡（現在の南小樽駅周辺）から高島郡（現在の小樽駅周辺）へと進み、榎本所有地は小樽市街地の中心となり、土地売却による利益は莫大であった。小樽の建設は、札幌などと異なり、民間主導による都市建設の典型的事例であった。

第四に、これまで、まったく別個に行われてきた自由民権研究と移民・植民研究を、殖民協会（1893年設立）という場を分析することにより結びつけたことである。榎本は文相罷免後、メキシコ植民事業に着手していたが、自由党の星亨、板垣退助も壮士たちによる海外植民を構想しており、これらが合流して殖民協会の設立となったことを明らかにした。

本論文は、榎本武揚の経歴および活動が多方面にわたることから、分析対象も多様になっている。その結果、榎本武揚の伝記研究の水準を引き上げるにとどまらず、明治期の政治史、外交史、北海道史、移民史研究への寄与も少なくないものと評価できる。

本論文は、本格的な榎本武揚研究として、従来の通説に修正を迫るものであること、幅広い分野においていくつもの新知見が得られたことについては高く評価できる。しかし、序章において、「権力構造」概念についての説明がないこと、榎本の政治資金源については明らかにされたものの、その配分や使途についての分析・言及が不足していること、などの問題点も見受けられた。口頭試問では、これらの問題点について本人からの説明もあり、今後の課題も明確にされた。審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。